

義母と息子の激しいセックスの日々

朝日が照らす閑静な街の一角。

遠く離れた場所には大規模なショッピングモールが街を活気付けている。

観光者も多い街。しかしこの周辺地域はいわゆるベッドタウン、住宅街である。

とある一家があった。

息子の陽太（ようた）は、シャワーを浴びながらペニスを屹立させていた。

”セックスがしたいよお・・・・・・・・”

しごきたてる両手の動きは止まらない。

シュコシュコシュコシュシュシュツツ・・・・・・・・・・シュコシュコシュコ
シュコツ・・・・・・・・

物凄い速さで脈打つ肉棒を上下させる。

お腹に張り付くその張力を無理やり下に押し下げ、しごき続ける。

数年前に性欲が芽生えてから、その衝動は日に日に増していた。

友人たちも皆同様なのであろうが、そんな素振りは見せない。陽太がとりわけ内向的なわけではなく、そういった会話にならないのだ。小学生の時などはひたすらそういった会話で盛り上がり上がりしたが、本当に芽生えてからは皆そういう話題を避けるようになった。

皆、家で同じようにひっそりしごいているに違いない。

「こんにちはっ！！今日も良い陽気ですわね」

「ほんと。夏も近いですわ。奥さん」

洗濯物を干そうと籠（カゴ）を抱えながら、自宅の庭から近隣の住人に挨拶をするのは美夜子（みよこ）。陽太の義母である。37歳だ。

4年前に陽太の父親の後妻としてこの家にやってきた。

陽太とは当たり触りのない関係、といったところか。決して仲が悪いわけではなかったが、それほど親しく会話するわけでもなかった。しかし互いに無口なタイプではない。社交的で明るい方だ。

もともと、陽太は父親に厳粛に育てられてきた。父親っこだ。

ピアノに習字、英会話に学習塾・・・習い事も多くさせられてきた。

父親はそこそこエリートの商社勤めである。

義母の美夜子は、仕事の家事はもちろん趣味のバイオリンにも忙しい日々を送っている。近隣づきあいも良く、地域の行事にも頻繁に顔を出している。

陽太も美夜子もあれこれと忙しく、家で一緒になるのは食事の時くらいであった。父親は勤めが遅く、出張も頻繁で家にいることは限りなく少なかった。

そんなある日、陽太は美夜子の自室で着替えを目撃した。

5月の中旬の夜。少し熱く、美夜子が汗をかいていたので厚手の上着を脱いでシャツ一枚になろうとしていた時だった。

インナーのシャツも上着に絡まるように上がり、水色のブラジャーが陽太の目にちらっと映る。

!!!!!!!!!!!!

「母さんのブラジャーが見えたよお・・・」

・・・陽太はそれをきっかけに義母に対する性的本能が制御不能に陥る。

そしてその後数日は、いつもと同様にシャワーを浴びながらしごきたてる自慰行為もエスカレート。頭の中は義母のことでいっぱいだった。

ビュルルルルルルルルルッッ!!!!!!!!

しばらくふんぞり返って我慢してはみたものの、とうとう我慢できなくなる。そんな陽太は、とうとうシャワーを浴びている美夜子の元へ・・・

ぶりんっ!!!シャワーの一粒一粒が弾けるような肌に当たって跳ね返る。いつものように豊満でかつ華奢、ほどよく筋肉質、仕事で忙しい夫に慰められないのがあまりにもったいないようなセクシーな体を狭い個室にさらけだし、一人でシャワーを浴びていた時だった。

三つ折りになったシャワールームのプラスチックにゴムの縁がついた引き戸をガシャッと開き、すっぽんぽんで陽太は美代子の目の前に飛び込んだ。

「母さんっっ！！僕もう・・・セックスをしたくてどうしようもないよっ！！！」

びいんっ！！びんびんびいんっ！！！！

陽太のペニスは痙攣していた。一般的に見てあまりに卑猥なその様子。

かすかに雨がポツポツと降る夏近くにしては少し肌寒い夜であった・・・・・・。

「陽太っ！！？あ、あなたの・・・・ペニスったらっ！！！！」

美夜子は目を丸くする。

目の前には息子の勃起し、おへそに卑猥に張り付いた大きなオチンポ。赤々とずるずるに剥けて火照っている。

あんなに小さくウィンナーポークみたいだったペニスがこんなビックフランクウィンナーに成長するなんてっっ！！

信じられない。美夜子は舌なめずりをした。顔は火照り、涙は溢れ続けた。

3時間後、二人は美夜子の自室にいた。

互いに性器を舐め合いながら・・・・・・。

「んじゅぼっ・・・・ちゅぶぶふううっ・・・・美味しい・・・・美味しいわっ！！！」

「母さんっ！！ママっ！！女の人のここってこんなに貝殻みたいになってるんだねっ！！凄いやっ！！ぷしゅーっ！！って、、噴水みたいに聖水があふれ出てくるよおっ！！！」

夫が仕事で忙しく、性欲は確かに溜まっていたことは否めない日々。
それを理由にしていいわけではないのが重々分かってはいるが。
とにかく息子からの求めを断り切れなかった自分に罪悪感が生まれる。

夫に内緒で。

愛する夫に内緒でこんな行為をしているなんて。どうしてなんて罪深い女なの。。。。。

しかし、息子はセックスをしたくて我慢し続けていた。
コップからあふれ出るような性欲にどうしようもなかったのだ。

性欲を慰めるにはペニスをしごきたてるしか術がなく。同級生には相談できなかったと陽太は義母に伝えた。

————— 体験版はここまでです。—————